

新カリキュラムの集大成「看護総合・統合実習」報告

寺谷 愉利子, 河原 照子, 山下 八重子, 他看護学部教員一同

看護学部

新カリキュラム（平成 23 年 10 月文科省申請書提出）の集大成として、4 年生は領域実習終了後に「看護総合・統合実習（必修／選択）」に臨んだ。実習目的は、「実習の最終段階として位置づけ、医療チーム内での看護の役割やチームによる看護実践のあり方、および統合医療の要素を看護実践に応用する可能性についても、実習を通して考える機会を持つ。」、実習内容は総合的・統合的医療の視点からの見学を主とした。おわりに：本実習を担当した教員の多くが他大学へ異動した状況下で実習を実施した。今後、「総合的・統合的医療」の視点で本大学看護学部のシンボルとなるべく実習へと発展することを期待する。

安静臥床による自律神経の変化と不安の緩和効果に関する研究

藤田 智恵子

看護学部

本研究では臥床状態での心拍数解析機器による自律神経系のデータを基に、自律神経の変化と不安の緩和効果について検討した。

調査対象者は看護系大学生で、2014 年 2～4 月に M 大学実習室においてベッド上仰臥位でデータ収集を行い、30 分間のデータを分析対象とした。自律神経系についてはアクティブトレーサーを用い Willcoxon の符号付き順位検定等の統計手法を用い分析した。不安については清水らによる STAI 日本語版（1981）を用いた。調査にあたり所属大学の研究倫理委員会の承認を得、調査対象者には事前に十分な説明を行い文書で同意を得た。

対象者は 20 名（男性 6 名）で、平均年齢は 20.2 歳。状態不安得点は調査直前 39.8 ± 7.4 (SD)・直後 34.5 ± 7.8 (SD) と低下し、有意差が認められた ($p < 0.01$)。心拍は安静前半 15 分・後半 15 分の比較では前半 66.8 ± 10.0 (SD) から後半 63.2 ± 8.5 (SD) に減少し、有意差が認められた ($p < 0.01$)。

安静臥床により心拍と状態不安得点は有意に低下し、臥床により副交感神経が優位となり心拍が低下することで状態不安得点も低下していることが推測され、自律神経に与える体位の影響が示唆された。